

出題分析		
試験時間 90分	配点 学科による*	大問数 4題
分量（昨年比較）〔 減少 同程度 増加 〕		難易度変化（昨年比較）〔 易化 同程度 難化 〕
概 評 ——出題の特徴・特記事項		
<p>大問数は4題、解答形式は記述式であった。2023年度はすべての大問が（A）、（B）に分かれた実質8題、2024年度は実質6題、今年度は実質7題であった。総枝問数は昨年度に続いて減少し、記号選択問題も多くなり、論述問題は出題数、記述量ともに減少した。したがって、昨年比較で、分量はやや減少したといえる。一方で、非常に高い読解力・考察力を求める問題が多数出題されていることに変わりがなく、難易度は昨年とほぼ同程度といえる。</p>		

※ 募集要項を参照。

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
I	(A) 制限酵素 プラスミド 電気泳動 (B) 受容体のリン酸化 酵素と遺伝子の作用機序	問2 操作Iを終えた時点では、5000塩基対同士の両端同士が結合したプラスミド、元の位置に再結合した7000塩基対のプラスミド、2000塩基対の断片が逆向きに結合した7000塩基対のプラスミドの3種類が考えられる。 問4・5 図4から、野生型の受容体Xは常にリン酸化しており、受容体Yは野生型の受容体XとサイトカインAがあればリン酸化される。そして、これらの条件がそろったときに、調節タンパク質Sがリン酸化される。	(A) 標準 (B) やや難
II	(A) rRNA, tRNA ゲノムサイズ STR 配列 (B) 遺伝	問3 図3のバンドの点線を上から①～④とすると、親Aと子Cの結果から、親Bは必ず③に位置するバンドをもつ。これをふまえて、(あ)の結果の場合、親Bが①に位置するバンドをもてば、同じ反復回数のSTRを受け継いだと考えられる。同様にして、順番に考えていけばよい。 問4 それぞれの塩基数と反復回数をかけて、STRの塩基数を3で割ればよい。(う)の場合のみ割り切れて、フレームシフトが起こらない。	(A) やや難 (B) 標準

設問別講評			
III	(A) 春化 ジベレリン (B) 平衡感覚	問2 処理区2と比較すると、処理区3は同じ結果、処理区4は開花までの日数が未処理の処理区1と同じになっているので、活性型ジベレリンは低温処理によって誘導され、開花を促進すると考えられ、試薬Xは活性型ジベレリンの誘導を抑制すると考えられる。 問4 処理によって検出された誘導体の数に基づく、GとEはすぐに決定できる。また、処理によって検出された誘導体の数が1つであることから、A、B、C、Dは端になることもわかる。	(A) 標準 (B) やや難
IV	植物ホルモン 気孔の閉鎖 寄生植物	問3 1つ1つグラフと照らし合わせて考えればよく、平易な問題であるが、次の問4のヒントになるので、しっかりと確認しておきたい。	標準

設問構成（設問数・形式・内容）								
大問番号	設問数 (枝問総数※)	選択式 枝問数	記述式 枝問数	語句※1 (空所補充) (一問一答)	計算	論述	描図※2	その他
I	6問(9)	4	5	7	0	2	0	論述はすべて字数制限なし。
II	7問(10)	5	5	7	3	0	0	論述はすべて字数制限なし。
III	8問(13)	10	3	10	0	3	0	論述はすべて字数制限なし。
IV	6問(8)	4	4	5	0	3	0	論述はすべて字数制限なし。

※ 「枝問総数」は各設問（小問）に含まれる枝問も個々に数えた場合の全設問（小問・枝問）の総数。設問形式・設問内容別の設問数も、これと同様の方法で算出した。

※1 化学式・構造式・化学反応式を含む。

※2 グラフ・図を含む。

合格のための学習法
<p>京都大学入試生物において求められる能力は、読解力・考察力・答案作成能力である。これらを養うための基本として、可能であれば複数の出版社の教科書を準備し、隅々まで理解を深めておきたい。そして、一般的な問題集で十分に学習した上で、さらに京都大学の他にも、東京大学・大阪大学などの過去問演習をしっかりと行う必要があるだろう。また、高度な内容や教科書範囲内を超えた題材が扱われることも多いため、専門書などに触れ、豊富な知識を蓄えておけば、より自信をもって解答ができるようになるだろう。</p>